

令和4年度農作物有害動植物発生予察情報 発生予報第5号（8月）

令和4年7月27日
山形県病害虫防除所

[概要]

普通作物：穂いもちの発生量は平年並の予想です。出穂前後は重要な防除時期に当たるので、穂孕後期及び穂揃期の2回の防除を徹底してください。

斑点米カメムシ類の発生量は多い予想です。穂揃期及び穂揃期7～10日後の2回、必ず薬剤防除を実施してください。

園芸作物：果樹、野菜・花きでハダニ類の発生量はやや多い予想です。早期発見に努め、密度が高くなる前に防除を徹底してください。

次の発表は8月31日の予定です。

予報内容一覧

作物名	病害虫名	発生時期	発生量
いね	穂いもち	—	平年並
	紋枯病	—	やや少ない
	斑点米カメムシ類	—	多い
だいず	マメシンクイガ	—	平年並
	ジャガイモヒゲナガアブラムシ	—	平年並
	ウコンノメイガ	—	平年並
りんごもも 果樹共通害虫	斑点落葉病	—	平年並
	灰星病	—	やや少ない
	果樹カメムシ類 (り・も・な・か)	—	やや多い
	ナミハダニ (り・も・な・お)	—	やや多い
	ナシヒメシンクイ (り・も・な)	—	やや多い
夏秋きゅうり	炭そ病	—	平年並
	褐斑病	—	平年並
	べと病	—	やや少ない
秋冬ねぎ 野菜・花き共通害虫	葉枯病	—	平年並
	ネギアザミウマ	—	やや多い
	アブラムシ類 (夏・す・え・き)	—	やや少ない
	ハダニ類 (夏・す・え・き)	—	やや多い
	オオタバコガ (夏・す・ね・え・き)	—	平年並

下記の病害虫は、防除上注意すべき事項などについて記載しています。

作物名	病害虫名
いね	コブノメイガ
だいず	紫斑病
りんご	黒星病、褐斑病、輪紋病、炭そ病
ぶどう	灰色かび病、晩腐病、べと病、褐斑病、さび病
もも	せん孔細菌病
西洋なし	輪紋病
日本なし	黒星病
果樹共通害虫	モモシンクイガ (り・も・な)、ウメシロカイガラムシ (も・お)
夏秋きゅうり	うどんこ病
すいか	炭そ病、つる枯病、褐色腐敗病、疫病
秋冬ねぎ	さび病、ネギハモグリバエ、シロイチモジヨトウ
えだまめ	ダイズサヤタマバエ
きく	アザミウマ類
畑作物・園芸作物共通害虫	ハスモンヨトウ (豆・か・夏・ね・え・き)

() 内 豆：だいず、り：りんご、も：もも、な：なし (西洋なし、日本なし)、お：おうとう、か：かき、夏：夏秋きゅうり、す：すいか、ね：秋冬ねぎ、え：えだまめ、き：きく

山形県病害虫防除所 本所	TEL 023-644-4241	FAX 023-644-4746
庄内支所	TEL 0235-78-3115	FAX 0235-64-2382
山形県病害虫防除所トップページ	https://agr.in.jp/theme/byogaichubojosho/index.html	
農作物有害動植物発生予察情報	https://agr.in.jp/theme/safe_products/yosatsu/index.html	

山形県農薬危害防止運動実施中

実施期間 令和4年6月1日～8月31日

山形県では関係機関と連携して、農薬が最も使用される時期を重点に、農薬による事故防止と、より一層の農薬適正使用に向けて農薬危害防止運動を行っています。農薬の使用に当たっては、以下の点に注意しましょう。

1. 農薬の購入と保管管理に当たって

- ★農薬は農林水産省登録番号のあるものを、必要量だけ計画的に購入しましょう。
- ★購入時は有効年月を確認し、期限内に使用しましょう。
- ★農薬は盗難・誤用の防止等のため、鍵のかかる専用保管庫で保管しましょう。
- ★不用になった農薬を処分する場合は、農協や農薬販売店等にご相談ください。また、農薬の空容器、空袋等は、廃棄物処理業者に処理を委託する等適切に処分しましょう。

2. 農薬の使用に当たって

- ★ラベルに記載されている①適用作物、②使用量（希釈倍数）、③有効成分ごとの総使用回数、④使用時期（収穫前使用日数）等をよく読んで、記載事項を正しく守って使用しましょう。
- ★農薬散布に当たっては、事前に周辺の生産者、養蜂家、住民等に防除計画をお知らせするとともに、周辺ほ場の農作物や住宅地、公共施設、家畜、河川等への飛散・流出を防止するため、次の点に十分に注意しましょう。
 - ア 風の強いときを避け、風向に気をつけて散布しましょう。
 - イ 散布量が多くなりすぎないように気をつけましょう。
 - ウ 散布の方向や位置に気をつけて散布しましょう。
 - エ 飛散しやすい細かい散布粒子のノズルは使わないようにし、散布圧力は必要以上に上げすぎないようにしましょう。
- ★散布者自身の事故防止のため、農薬用マスク、保護メガネ、防除衣、手袋等を必ず着用するとともに、気温が高いときや、体調が悪いときは散布をしないようにしましょう。
- ★公園等で病害虫管理を行う時は、「公園・街路樹等病害虫・雑草管理マニュアル」（環境省ホームページで公表）を参照してください。

3. 農薬散布後は

- ★タンクやホースは確実に洗浄し、また、洗浄液が排水路や河川等に流出しないようにしましょう。
- ★農薬の使用月日、農薬名、対象作物名、使用量（希釈倍数）等を忘れずに記録し、保管してください。

4. 万が一の事故の場合

- ★農薬の誤使用等で健康被害が発生した場合には、応急処置を行い、速やかに最寄りの医療機関で処置してもらいましょう。

農薬の相談は：○食品安全衛生課(023-630-2160)

○農業技術環境課(023-630-3419)

○病害虫防除所(023-644-4241) 庄内支所(0235-78-3115)

○最寄りの各総合支庁各農業技術普及課

農薬情報は：○やまがたアグリネット（愛称：あぐりん） <https://agrin.jp/>

毒物・劇物の相談は：○最寄りの各保健所

・山形市保健所(023-616-7261)

・村山保健所(023-627-1248)

・最上保健所(0233-29-1257)

・置賜保健所(0238-22-3872)

・庄内保健所(0235-66-5478)

○コロナ収束総合企画課(023-630-2332)

公園等病害虫等管理

マニュアルの相談は：○水大気環境課(023-630-2339)

1. 農薬使用基準（適用作物、使用量（希釈倍数）、使用回数、使用時期（収穫前使用日数））を遵守する。
2. 合成ピレスロイド剤等を使用する場合は、市町村農作物有害動植物防除協議会等で定めた地区に限って使用し、蚕・魚類に対する被害を防止する。
3. 耐性菌・抵抗性害虫の出現を防止するため、薬剤の選択及び使用回数に留意する。
4. 農薬の使用に当たっては、農薬使用者と養蜂家がお互いに連携をとりながら、農薬の使用によるミツバチへの危害を防止する。
5. 農薬の使用後は防除日誌の記帳に努める。

予報根拠中の記号 （+）：発生量を多くする要因 （-）：発生量を少なくする要因

I 普通作物

1. いね

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(1) 穂いもち	平年並

1) 予報の根拠

- ア. 7月25日現在、葉いもちの発生量は平年並であるが、7月4半旬以降、感染好適条件が連続して出現しているため、上位葉の発病が懸念される。（+）
- イ. 7月20日現在、いねの葉色は平年並、茎数は少ない。
- ウ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は少なく、日照時間は平年並か多いと予報されている。（-）

2) 防除上注意すべき事項

- ア. 穂いもちの防除は、穂孕後期及び穂揃期の2回の基本防除を徹底する。
- イ. 圃場をよく観察し、上位葉に葉いもちの発生が見られる圃場や穂いもちの常発地、出穂期前後に降雨があったところでは、穂揃期散布の7日後にも防除を行う。
- ウ. 航空防除や無人航空機等の共同防除を計画しているところでも、天候等により防除時期が遅れる場合には、個人防除を実施する。
- エ. 薬剤耐性菌出現防止のため、同一成分の薬剤の連用は避ける。

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(2) 紋枯病	やや少ない

1) 予報の根拠

- ア. 7月25日現在の発生量はやや少ない。（-）
- イ. 7月20日現在、いねの茎数は少ない。（-）
- ウ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は少ないと予報されている。

2) 防除上注意すべき事項

- ア. 前年発生が多く見られた圃場や、例年発生の見られる圃場では、圃場をよく観察し、発生が確認される場合は下表の防除要否の目安を参考に出穂期の防除を行う。
- イ. 薬剤散布を行う場合は、株元に十分付着するように散布する。

表 防除要否の目安（調査場所：水田中央部） 品種：はえぬき

判定時期	防除の判断基準
穂孕後期	発病株率 10%以上で防除
出穂期	発病株率 15%以上で防除

※1筆当たり5条おきに20株の計100株を水田中央部まで調査

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(3) 斑点米カメムシ類 (アカシガシカメ ・アカヒゲホソトリカシカメ ・オトゲシホカメムシ)	多 い

<7月7日付け 発生速報第3号発表>

<7月21日付け 注意報第1号発表>

1) 予報の根拠

- ア. 7月後半の巡回調査の結果、斑点米カメムシ類の畦畔・農道等における発生確認地点率はやや高く、平均すくい取り虫数は多い。(＋)
- イ. 7月後半の巡回調査の結果、斑点米カメムシ類の水田内における発生確認地点率はやや高く、平均すくい取り虫数はやや多い。(＋)
- ウ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は少ないと予報されている。(＋)

2) 防除上注意すべき事項

- ア. 穂揃期及び穂揃期7～10日後の2回の基本防除を徹底する。なお、圃場の出穂状況をよく確認し、適期に防除する。
- イ. 航空防除や無人航空機等による防除を計画しているところでも、天候等により防除時期が計画より遅れる場合には、個人防除を実施する。
- ウ. 水田内にイヌホタルイ等のカヤツリグサ科雑草やノビエが多い圃場では、斑点米カメムシ類の水田内での発生が多くなるので注意する。
- エ. 穂揃期7～10日後の薬剤防除（基本防除2回目）を実施後に水田内のすくい取り調査を行い、斑点米カメムシ類の飛来・生息が確認された場合は、基本防除2回目の防除から7～10日後に補完防除を実施する。
- オ. 畦畔・農道等水田周辺の草刈りは、斑点米カメムシ類の水田侵入を促し、斑点米の発生を助長するので原則行わない。やむを得ず草刈りを行う場合は、水田の薬剤防除計画に合わせて実施する。

(4) コブノメイガ

7月後半の巡回調査の結果、被害は見られていないが、今後、台風や低気圧の通過に伴い多飛来することがあるので発生動向に注意する。

2. だいず

(1) 紫斑病

開花期25～35日後に薬剤散布を行う。なお、薬剤散布を行う場合は、莢に薬剤が付着するようていねいに散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(2) マメシンクイガ	平年並

1) 予報の根拠

前年の発生量は平年並であった。

2) 防除上注意すべき事項

- ア. 連作圃場や前年発生が多かった圃場では、生息密度が高くなる傾向があるので、8月下旬（8月25日頃）及び9月上旬（前回散布10日後）の2回、必ず薬剤散布を行う。
- イ. 薬剤散布を行う場合は、莢に薬剤が付着しないと十分な防除効果が得られないので、ていねいに散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(3) ジャガイモ ヒゲナガアブラムシ	平年並

1) 予報の根拠

ア. 7月25日現在、本種の寄生及び加害による吸汁痕（黄色斑点）の発生量は平年並である。

イ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は少ないと予報されている。

2) 防除上注意すべき事項

ア. 8月以降急激に増加することがあるので、現在発生が少ないところでも定期的に圃場を見回り、葉裏の寄生状況をよく観察する。本種の寄生虫数や吸汁痕の増加が見られる場合には、速やかに薬剤散布を行う。

イ. 薬剤散布を行う場合は、薬剤が葉裏にも十分付着するようていねいに散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(4) ウコンノメイガ	平年並

1) 予報の根拠

ア. 7月25日現在の発生量は平年並である。

イ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は少ないと予報されている。

2) 防除上注意すべき事項

8月上旬頃から被害（葉巻）が目立ち始めるので、圃場をよく観察し、被害が多い場合は防除を行う。特に、生育の旺盛な圃場や葉色の濃い圃場で多発生する傾向があるので注意する。

II 園芸作物

1. りんご

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(1) 斑点落葉病	平年並

1) 予報の根拠

ア. 7月25日現在の発生量は平年並である。

イ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は少ないと予報されている。

2) 防除上注意すべき事項

ア. 不要な徒長枝はせん除し、樹冠内部への薬剤到達性を高める。

イ. 薬剤散布予定日に降雨が予想される場合には、降雨前に防除を行うとともに、散布間隔があきすぎないようにする。なお、降雨が続く場合は雨の合間を見て防除を行う。

(2) 黒星病

7月後半の巡回調査及び7月12、13日に行った特別巡回調査の結果、発生量は平年並であるが、前年と比較して発病果の発生確認地点率が高い。今後の感染拡大を防止するため、以下の対策を実施する。

ア. 園内をこまめに観察し、発病葉や発病果は二次伝染源になるため、見つけ次第摘み取り適切に処分する。

イ. 薬剤散布に当たっては、不要な徒長枝はせん除し、樹冠内部への薬液到達性を高めるとともに、十分な薬液量（500L以上/10a）でていねいに散布する。また、スピードスプレーヤにより防除する場合は、散布速度や散布経路に注意し、散布ムラを防ぐ。

ウ. 薬剤散布予定日に降雨が予想される場合には、降雨前に防除を行うとともに、散布間隔があきすぎないようにする。なお、降雨が続く場合は雨の合間を見て防除を行う。

(3) 褐斑病

降雨が続くと発生が多くなるので、薬剤の散布間隔があきすぎないように防除を行う。また、不要な徒長枝はせん除し、樹冠内部への薬液到達性を高める。

(4) 輪紋病、炭そ病

降雨が続くと感染が多くなるので、薬剤の散布間隔があきすぎないように防除を行う。なお、散布予定日に降雨が予想される場合には、降雨前に防除を行う。

また、炭そ病の発病果は二次伝染源となるので見つけ次第摘み取り適切に処分する。

2. ぶどう

(1) 灰色かび病、晩腐病

7月後半の巡回調査結果、灰色かび病の発生量は平年並であるが、圃場の一部で花冠の付着した果房で発生が確認された。また、晩腐病の発生は確認されていない。これらの発病果房は二次伝染源となるため、見つけ次第摘み取り適切に処分する。

(2) べと病、褐斑病、さび病

デラウェアは収穫終了後、直ちに薬剤散布を行う。なお、大粒種では8月以降もべと病が多発する恐れがあるので、8月上旬～中旬に防除を行う。

3. もも

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(1) 灰星病	やや少ない

1) 予報の根拠

ア. 7月25日現在、果実の発生は確認されていない（平年初確認日：7月25日）。

イ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は少ないと予報されている。（一）

2) 防除上注意すべき事項

ア. 園内の見回りを徹底し、発病果は見つけ次第摘み取り適切に処分する。

イ. 中生種及び晩生種では、収穫開始時期を考慮し、農薬使用基準を遵守し、散布間隔があきすぎないようにする。

(2) せん孔細菌病

7月後半の巡回調査の結果、発生量は平年並であるが、7月前半の巡回調査時よりも発生が増加している園が見られる。今後の感染拡大を防止するため、以下の対策を実施する。

ア. 発病葉や発病果は二次伝染源になるので、見つけ次第摘み取り、適切に処分する。

また、発病枝も見つけ次第せん除し、園外で適切に処分する。

イ. 例年発生が見られる園や風当たりの強い園では、防風ネットを設置する。

4. 西洋なし

(1) 輪紋病

降雨が続くと感染が多くなるので、薬剤の散布間隔があきすぎないように防除を行う。なお、散布予定日に降雨が予想される場合には、降雨前に防除を行う。また、キャプタン・有機銅剤を使用する防除体系においては、本剤散布後からの積算降水量が100mmに達する前に次の薬剤散布を行う。

5. 日本なし

(1) 黒星病

7月25日現在の発生量は平年並である。園内の見回りを徹底し、発病果、発病葉は見つけ次第摘み取り適切に処分する。また、降雨が続くと発生が多くなるので、薬剤の散布間隔があきすぎないように雨の合間を見て防除を行う。なお、散布予定日に降雨が予想される場合には、降雨前に防除を行う。

6. 果樹共通害虫

病 害 虫 名	対 象 作 物 名	予 報 内 容
		発 生 量
(1) 果樹カメムシ類 (クサギカメムシ・チャバネオカメムシ)	りんご・もも・なし ・かき	やや多い

<7月7日付け 発生速報第4号発表>

1) 予報の根拠

ア. 7月25日現在の発生量は、クサギカメムシが平年並、チャバネオカメムシはやや多い。

イ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は少ないと予報されている。(＋)

2) 防除上注意すべき事項

ア. 気温や湿度の高い日に果樹カメムシ類の飛来や吸汁加害が多くなりやすい傾向がある。また、8月前半は越冬後成虫に加えて新成虫も発生して密度が高まるため、園内を十分に見回り、樹上の寄生や被害果の発生に注意する。

イ. 園内で成幼虫の寄生や卵塊、被害果が確認される場合は、速やかに捕殺や薬剤散布を行う。

ウ. 薬剤の選定に当たっては「山形県病虫害防除基準」を参照し、果樹カメムシ類に効果のある薬剤で防除を実施する。

病 害 虫 名	対 象 作 物 名	予 報 内 容
		発 生 量
(2) ナミハダニ	りんご・もも・なし ・おうとう	やや多い

1) 予報の根拠

- ア. 7月25日現在の発生量は平年並であるが、一部寄生密度の高い園が見られる。
- イ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は少ないと予報されている。(＋)

2) 防除上注意すべき事項

- ア. ナミハダニは高温・乾燥条件で急増する場合がありますので、園内をこまめに観察し、ハダニ類の成幼虫数が1葉当たり3頭以上見られたら薬剤を散布する。
- イ. ナミハダニの下草における増殖を抑制するため、園内の除草を励行する。なお、除草後に下草から移動したナミハダニにより樹上密度が高まることがあるので、除草後に薬剤を散布する場合は下草が枯れるまで待つて行う。
- ウ. 樹冠内部の散布ムラを生じないように不要な徒長枝はせん除し、薬液到達性を高め、十分量の薬液をていねいに散布する。
- エ. 気門封鎖剤の使用に当たっては、殺卵効果が期待できないため、1週間間隔で2～3回、薬液が葉に十分付着するようていねいに散布する。

病 害 虫 名	対 象 作 物 名	予 報 内 容
		発 生 量
(3) ナシヒメシンクイ	りんご・もも・なし	やや多い

1) 予報の根拠

- ア. 7月25日現在の発生量はやや多い。(＋)
- イ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は少ないと予報されている。

2) 防除上注意すべき事項

- ア. もも、なしの果実は特に被害を受けやすいので、園内をよく見回り、心折れや被害果は見つけ次第摘み取り適切に処分する。
- イ. 8月以降も被害が継続するため、薬剤の散布間隔があきすぎないように適切に防除を実施する。なお、被害が見られる園では、薬剤の選定に留意する。
- ウ. 4月に交信かく乱剤（コンフューザーR、コンフューザーN）を設置した園では、8月に入り効果が不安定になることがあるので被害の発生状況に注意する。

(4) モモシンクイガ（りんご・もも・なし）

7月25日現在の発生量は平年並である。園内をよく見回り、被害果は見つけ次第摘み取り適切に処分する。なお、8月以降も被害が継続するため、薬剤の散布間隔があきすぎないように適切に防除を実施する。

(5) ウメシロカイガラムシ（もも・おうとう）

樹冠上部までよく観察し、ふ化幼虫（体長0.3mm程度の橙黄色の幼虫）の発生時期（8月2～3半旬頃）に薬液が枝幹部に十分付着するようていねいに散布する。特にももの防除は、収穫開始時期を考慮し、農薬使用基準を遵守する。

7. 夏秋きゅうり

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(1) 炭そ病	平年並

1) 予報の根拠

- ア. 発病葉の初確認は7月中旬（5か年平均初確認：8月上旬）で早い。（+）
- イ. 7月25日現在の発生量は平年並である。
- ウ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は少ないと予報されている。（-）

2) 防除上注意すべき事項

- ア. 園内をよく見回り早期発見に努め、発病葉は見つけ次第取り除き、圃場外に搬出し、適切に処分する。
- イ. 薬剤散布は、予防防除を基本とし、薬液が葉裏まで十分付着するようていねいに行う。
- ウ. 降雨が続く場合には、薬剤の散布間隔があきすぎないように雨の合間を見て防除を行う。
- エ. 過繁茂にならないよう適切な肥培管理を行い草勢維持に努め、通風をよくする。

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(2) 褐斑病	平年並

1) 予報の根拠

- ア. 7月25日現在、発生は確認されていない(平年初確認：8月上旬)。
- イ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は少ないと予報されている。

2) 防除上注意すべき事項

- ア. 発病葉は見つけ次第取り除き、圃場外に搬出し、適切に処分する。
- イ. 薬剤散布は、予防防除を基本とし、薬液が葉裏まで十分付着するようていねいに行う。
- ウ. 降雨が続く場合には、薬剤の散布間隔があきすぎないように雨の合間を見て防除を行う。
- エ. 過繁茂にならないよう適切な肥培管理を行い草勢維持に努め、通風をよくする。

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(3) ベと病	やや少ない

1) 予報の根拠

- ア. 7月25日現在の発生量は平年並である。
- イ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は少ないと予報されている。（-）

2) 防除上注意すべき事項

- ア. 発病葉は見つけ次第取り除き、圃場外に搬出し、適切に処分する。
- イ. 降雨が続く場合には、薬剤の散布間隔があきすぎないように雨の合間を見て防除を行う。
- ウ. 過繁茂にならないよう適切な肥培管理を行い草勢維持に努め、通風をよくする。

(4) うどんこ病

乾燥が続いたり、草勢が低下すると発生が多くなるので、適切な肥培管理を行い草勢維持に努め、圃場をよく見回り発生初期の防除を徹底する。なお、発病葉は見つけ次第取り除き、圃場外に搬出し、適切に処分する。

8. すいか

(1) 炭そ病、つる枯病

降雨が続くと発生が多くなることがあるので、薬剤の散布間隔があきすぎないように雨の合間を見て防除を行う。薬剤散布は、薬液が葉裏や株元及び果実まで十分付着するようていねいに行う。

(2) 褐色腐敗病、疫病

雨水が滞水した場合は、突発的に発生することがあるので直ちに排水を行った後、防除を行う。なお、発病果は直ちに除去し、適切に処分する。

9. 秋冬ねぎ

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(1) 葉枯病	平年並

1) 予報の根拠

ア. 7月25日現在の発生量は平年並である。

イ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は少ないと予報されている。(一)

2) 防除上注意すべき事項

ア. 薬液が株全体に十分付着するようていねいに散布する。

イ. 降雨が続く場合は、薬剤の散布間隔があきすぎないように防除を行う。

(2) さび病

7月25日現在の発生量は平年並であるが、一部地域では発病程度の高い圃場が見られている。発生が見られる圃場では、降雨が続くと発生が多くなることがあるので、薬剤の散布間隔があきすぎないように雨の合間を見て防除を行う。

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(3) ネギアザミウマ	やや多い

1) 予報の根拠

ア. 7月25日現在の発生量は平年並である。

イ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は少ないと予報されている。(十)

2) 防除上注意すべき事項

ア. 雑草での増殖及び圃場への飛来を防止するため、圃場内及び周辺の除草を徹底する。

イ. 高温・乾燥が続くと密度が高まるため、防除を徹底する。

ウ. 被害が見られる圃場では、散布間隔をあけずに防除を行い、密度の低下を図る。

エ. 薬剤散布に当たっては、薬液が株全体に十分付着するようていねいに行う。

また、薬剤抵抗性出現を防止するため、作用性の異なる薬剤グループを輪用散布する。

(4) ネギハモグリバエ

7月25日現在の発生量はやや少ないが、一部の圃場では1葉に幼虫が多数寄生している株が確認されている。高温が続くと密度が高まるため、圃場をよく観察し早期発見に努め、密度が高くなる前に防除を行う。

(5) シロイチモジヨトウ

7月5半旬までの地区予察圃場（酒田市）のフェロモントラップにおける誘殺数は平年並であり、内陸地域でも誘殺が確認されている。また、一部の圃場では被害が見られている。今後、台風や低気圧の通過に伴い多飛来することがあるので、圃場をよく見回り早期発見に努め、被害発生初期（先端部が白く透けた時）に防除を行う。

10. えだまめ

(1) ダイズサヤタマバエ

高温が続くと発生が多くなるので、幼莢期の防除を徹底する。なお、薬剤散布の際は、薬液が莢に十分付着するようていねいに散布する。

11. きく

(1) アザミウマ類

7月25日現在の発生量は平年並である。今後、高温が続くと密度が高まるため、以下の対策を実施する。

ア. 圃場内及び周辺の雑草にも寄生するので除草を徹底する。

イ. 花蕾を加害されると品質低下をまねくので、薬剤散布の際は、薬液が花蕾部にも十分付着するようていねいに散布する。

ウ. 薬剤抵抗性出現を防止するため、作用性の異なる薬剤グループを輪用散布する。

エ. アザミウマ類はトマト黄化えそウイルス（TSWV）を媒介するため防除を徹底する。

12. 野菜・花き共通害虫

病 害 虫 名	対 象 作 物 名	予 報 内 容
		発 生 量
(1) アブラムシ類	夏秋きゅうり・すいか ・えだまめ・きく	やや少ない

1) 予報の根拠

ア. 7月25日現在の発生量はやや少ない。（一）

イ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は少ないと予報されている。

2) 防除上注意すべき事項

早期発見に努め、密度が高くなる前に防除を徹底する。なお、薬液が茎頂部や葉裏にも十分付着するようていねいに散布する。

病 害 虫 名	対 象 作 物 名	予 報 内 容
		発 生 量
(2) ハダニ類	夏秋きゅうり・すいか ・えだまめ・きく	やや多い

1) 予報の根拠

- ア. 7月25日現在の発生量は平年並であるが、寄生密度の高い圃場も散見される。
- イ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は少ないと予報されている。(＋)

2) 防除上注意すべき事項

- ア. 早期発見に努め、密度が高くなる前に防除を徹底する。なお、薬液が葉裏にも十分付着するようていねいに散布する。
- イ. 薬剤を散布する場合は、薬剤抵抗性出現を防止するため、同一薬剤の連用を避ける。但し、気門封鎖剤は殺卵効果が期待できないため、1週間間隔で2～3回、葉に十分付着するようていねいに散布する。

病 害 虫 名	対 象 作 物 名	予 報 内 容
		発 生 量
(3) オオタバコガ	夏秋きゅうり・すいか ・秋冬ねぎ・えだまめ ・きく	平年並

1) 予報の根拠

- ア. 7月25日現在の発生量は平年並である。
- イ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は少ないと予報されている。

2) 防除上注意すべき事項

- ア. 圃場をよく見回り、早期発見に努める。
- イ. 幼虫の寄生や被害が見られる場合は、直ちに薬剤防除を行う。なお、薬液が株全体に十分付着するようていねいに散布する。
- ウ. 被害部位（果実、花蕾、新芽等）は、内部に幼虫が生息している場合があるので適切に処分する。
- エ. 台風や低気圧の通過に伴い多飛来することがあるので、今後の発生動向に注意する。

13. 畑作物・園芸作物共通害虫

- (1) ハスモンヨトウ（だいず、かき、夏秋きゅうり、秋冬ねぎ、えだまめ、きく）

＜7月12日付け 発生速報第5号発表＞

7月5半旬までのフェロモントラップにおける誘殺数は、県予察圃場（山形市）、地区予察圃場（鶴岡市）ともにやや多い。

本種は広食性で、だいず、果樹、野菜、花き等多くの作物を加害するので、圃場をよく見回り、早期発見に努め、若齢幼虫期に防除する。なお、台風や低気圧の通過に伴い多飛来することがあるので、今後の発生動向に注意する。

[発生予察情報で使用される時期、量の表現の基準]

1. 時期

平 年 並	平年値（過去10か年の平均）を中心として前後2日以内
やや早い	平年値より3～5日早い
ややおそい	平年値より3～5日おそい
早 い	平年値より6日以上早い
お そ い	平年値より6日以上おそい

2. 量（発生量、発生面積及び被害量等）

過去10年間の値を、発生が多い順に下図のように並べ、本年の値との比較により求めます。

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
←多い→	← やや多い →	← 平 年 並 →					← やや少ない →	←少ない→	

東北地方 1か月予報（07/23～08/22）		
2022年07月21日14時30分 仙台管区气象台 発表		
特に注意を要する事項	なし。	
向こう1か月 07/23～08/22	天候	東北日本海側では、平年に比べ晴れの日が多いでしょう。東北太平洋側では、天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が多いでしょう。
	気温	平均気温は、高い確率50%です。
	日照時間	日照時間は、平年並または多い確率ともに40%です。
1週目 07/23～07/29	気温	1週目は、高い確率50%です。
2週目 07/30～08/05	気温	2週目は、高い確率50%です。
3～4週目 08/06～08/19	気温	3～4週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

気温、降水量、日照時間の各階級の確率（%）			
気温	東北地方	向こう1か月 07/23～08/22	
		1週目 07/23～07/29	
		2週目 07/30～08/05	
		3～4週目 08/06～08/19	
降水量	東北地方	向こう1か月 07/23～08/22	
日照時間	東北地方	向こう1か月 07/23～08/22	

■ 低い(少ない) ■ 平年並 ■ 高い(多い)